

読書への誘い

＜第Ⅲ期 第 17 号＞通巻 1 1 2 号

10月も、はや中旬を迎えました。朝夕は肌寒いですが、日中、限りなく空は青く、風が素肌に心地よいですね。こんな日には、サイクリングに出掛けたくります。ポケットに1冊、本を押し込んで、ちょっと遠出をしましょうか。

絵本「永遠」

新川 和江

あそびの途中でふいにおまえは立ちあがり
 思慮浅い若い母親を狼狽させた
 おおえのうまへ帰ろうというのか
 つなげる血を紙テープよりまたやすく断ち切り
 馴れ親しんだ玩具たちを未練もなくほうり出して
 どんな声がおまえをよぶのか
 母親は耳をおまえをはげしくひきよせるのか
 相もかわらぬ蒼空にはいつしにききとろうとするが
 かたちならぬ雲ばかりあつて
 花壇のなかにむらも呆けて咲いているばかりで
 春の日はネルといひにもおだやかである
 つい今しがたまでその椅子に深く腰かけ
 乳牛の話などきかせてくれた
 北国の美しい青年は牧草の研究をしているという
 あすの美しい青年は
 絵本のなかの鳥の巣に
 狐は穴へもどつてねむった
 母親の知らぬまに
 おまえはどんな絵本を読んだのだろう
 帰ろうよ
 憑かれたようにせきたてるおまえのそばで
 最早は、や、よりも微少なひとつの物体にすぎなくなる
 母親は、や、よりも微少なひとつの物体にすぎなくなる

『41歳からの哲学』(池田晶子著・新潮社・2004年刊)

考えることに手遅れはない……。2003年に「人は14歳以後、一度は考えておかねばならないことがある」として『14歳からの哲学』を著した哲学者池田晶子の、この世の身近な出来事を深くやさしく考えた、大人のための哲学書。

「考えている暇などない」だと！？——情報化社会

情報通信省が設置されるとかしないとか。今さら言っても詮ないけれども、社会が情報化することが、どうしてよいことなのだろうか。情報化社会のことをよい社会だと、多くの人は疑っていないらしいことが、今さらながら理解できない。

私自身、ケータイもパソコンも所有していない。どころか、テレビですら天気予報以外はニュースぐらいしか観ないし、それだって仕事があればおそらく観ない。内的必要性を、ほとんど感じないのである。世間で起こっていることを知る、他人が何をしているかを知る必要が、どうして我々にはあるのだろうか。

たまにはゆっくり内省してみるといい。しかし「内省」などと言って、それがどのような状態なのかを理解する人すら、今や少ないはずである。内省というのは、読んで字の如く、内側を省みることである。自らを反省することである。他人や世間のあーだこーだを追いかけることでなく、自らで自らをじっくり見つめることである。

パソコンは自らで画面を見つめるものだが、そこで見つめられているものは、やはり他人や世間のあーだこーだである。自らの何であるかであるはずもない。自らの何であるかということは、他人や世間から得られる情報ではなくて、自ら考えることでのみ得られる知識だからである。自らで自らを考える作業のためにコンピュータは必要ない。だから私はそんなものに必要を感じないのである。

情報をたくさん持っていると、賢くなったかのようにも、人は思うのらしい。しかし、そんなことは大間違いである。他人や世間のどーでもいい情報を、いくらたくさん所有したところで、なんで賢くなることがある。あるいは、それがどーでもよくはない、きわめて重要な情報なのであれ、それを自ら考えて自らの知識にできるのでなければ、しょせんは情報である。自ら考える、たとえ外的情報のひとつもなくとも、自らで考えられるのでなければ、人が知識を自身の血肉として賢くなるということは、あり得ないのだ。

あるいは、「知る」ということと「わかる」ということは違うことだと言うこともできる。たくさんの情報を知っていたところで、それがどういうことなのかわかっていないわけではない。何であれ、それがどういうことなのかわかるためには、自ら考える以外はない。パソコンでなくとも、己の頭の中に情報をいっぱい詰め込んで、自ら考えているつもりの知識人も大勢いるが、あれは正確には情報人と呼ぶべきである。何をわかっているわけでもない。

しかし、「知る」と「わかる」の違いをどうしてわかるのかと問われるだろう。そんなことは、わかるものなのである。情報を知るという経験は人間を変えないが、「わかる」という経験は、必ず人間を変えるのである。わかれば、人は賢くなるのである。他人や世間のあーだこーだに右往左往しない、賢い人間になるのである。だからやっぱり、人は考えなければダメなのである。

しかし、悠長に考えている暇などない、今や情報化の時代なのだと、ここで人は言うに決まっている。しかし、そう言うこと自体が本末転倒であることは、述べてきた通りである。賢い人間になりたいかどうか、要はそれだけである。自分の人生、自分の生死、そのことの何であるかをわかることもなく終わっていいと思うのなら、どうぞ、お好きに。

私自身は、いつだって、よりよいより賢い人間になりたい。明治時代、日露戦争があったことも知らずに学究していた学者がいたという有名な逸話があるが、そのような人のありように、共鳴を覚える者である。じっさい、世の中そのような人ばかりになれば、世の中から戦争がなくなるのは道理であろう。IT推進など完全に逆である。内省することだけが世界を変えると、他人や世間があーだこーだの週刊誌上で、臆面もなく私は言っているのである。(pp.60-62)
 (雑誌「週刊新潮」平成16年2月12日号掲載)

※平成16年1月、小泉首相は海外の「情報通信省」の例を挙げながら、総務省と経済産業省にまたがっている情報通信政策部門の統合に、前向きな考えを示した。

